

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 柳澤 卓也

論 文 題 目

Preoperative physical activity predicts postoperative functional recovery in gastrointestinal cancer patients

(消化器がん患者において術前身体活動量は術後身体機能回復を予測する)

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	山田 純生
	名古屋大学教授	亀高 諭
	名古屋大学教授	杉浦 英志

論文審査の結果の要旨

消化器がん患者の術後身体機能低下はその後の補助治療（化学療法など）に影響を及ぼすため、早期から対策を講じるためには術後身体機能低下を予測することが重要である。身体活動量は身体機能と関連する修正可能な因子の1つであり、高齢者においては低身体活動量や座位時間の長期化が身体機能低下と関連することが報告されている。消化器がん患者においては術前の身体活動量は術後の介助なしでの起立の可否や術後在院日数と関連することが報告されており、術後の身体機能回復に影響を及ぼすことが推測されるが、術後の全身的な身体機能回復を反映した指標との関連は明らかになっていない。一方で6分間歩行距離(6-minute walk distance: 6MWD)は消化器疾患患者の術後身体機能回復の指標として妥当性があることが報告されているが、術前の身体活動量と6MWDを用いて客観的に評価した術後身体機能回復との関連を調査した報告はない。

本研究では手術治療を行う大腸がん、胃がん患者101例を対象に、術前の身体活動量と6MWDを用いて客観的に評価した術後身体機能回復との関連を調査した。

本研究で得られた知見を以下に要約する。

1. 術前に対する術後の6MWD低下率の中央値は-9.0%であった。
2. ロジスティック回帰分析の結果、術後の身体機能回復を予測する要因は、術前身体活動量、術前6MWD値、術前CRP値、合併切除の有無であった。




本研究は、消化器がん患者の周術期リハビリテーションを実施する上で、術後身体機能回復を予測する重要かつ介入方策のヒントとなる知見を提供した。

また、副論文として消化器がん患者を対象に、術前の座位時間が術後合併症を予測することも明らかにしている。

なお、本研究の成果は、Disability and Rehabilitation : IF = 3.03ならびにAsian Pacific Journal of Cancer Prevention : IF = 1.58に掲載されている。

以上の理由により、本研究は博士（リハビリテーション療法学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※第	号	氏名	柳澤 卓也
試験担当者	主査	名古屋大学教授	名古屋大学教授	名古屋大学教授
	山田 純生		亀高 諭	 杉浦 英志 
<p>(試験の結果の要旨)</p> <p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 消化器がん患者における術後末梢骨格筋の機能低下機序について 2. 多変量ロジスティクス解析における交絡因子の抽出法について 3. 術前の身体活動量が術後身体機能に関わる生理機序について 4. 本結果の一般化可能性について <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、<u>リハビリテーション療法学</u>一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				